

国内経済情勢

概観

設備投資は根強い増加を続け、輸出も高水準を保っているが、個人消費等の伸び悩みや素材関連業種を中心とする在庫調整の継続などから、景気の拡大テンポは緩やかであり、生産、出荷も一進一退のうちに推移している。

商品市況は、石油製品等を除き総じて軟弱地合いを続け、卸売物価も国内需給の引緩みや為替の円高化などを背景に続落している。10月の消費者物価は、野菜が好天に恵まれて大きく反落したため微落となり、前年比上昇率もかなり低下した。

金融面をみると、7～9月のマネーサプライの増勢は前四半期に比べさらに鈍化した。一方、9月の全国銀行貸出約定平均金利は8月の公定歩合引下げや金利先安感の高まり等を映じてかなり低下した。

9月の国際収支をみると、輸出が好伸した反面、原油を中心に輸入が大幅に落ち込んだため経常収支(貿易収支季節調整後)は1年7か月ぶりに黒字となった。この間、長期資本収支も5か月連続の大幅流入超を示したため、総合収支は引続き黒字を維持した。10月の為替相場は月初円高となったあと、下旬に入ってやや円安場面もみられたものの、月中を通じておおむね安定した動きを示した。

以上のような情勢にかんがみ、日本銀行は公定

歩合の1.0%引下げ(11月6日から実施)および預金準備率の引下げ(11月16日から実施)を決定した。

7～9月の生産、出荷はともに減少

9月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比*、速報)、同出荷(速報)は、前月著減(各-4.5%、-4.9%)のあと、それぞれ+3.7%、+3.4%と大幅に増加した。もっとも、7～9月通計では、生産、出荷は前期比各-2.3%、-3.6%とともに減少した(4～6月各+0.1%、-0.5%)。この間、9月の生産者製品在庫(速報)は前月微増(+0.1%)のあと1.0%の増加となった。

* 以下増減率は特に断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

9月の財別生産、出荷の特徴をみると、一般資本財は電力投資関連の発電機、産業用電気機械が増加したほか、前月大幅減少の化学機械やベルトコンベアの反動増もあって生産、出荷とも著増し、資本財輸送機械も小型自動車を中心に生産が顕著な伸びを示した。もっとも製品在庫の調整過程にある生産財(粗鋼、エチレン、板紙等)では、生産が小幅増加にとどまり、また建設財(鉄骨、アルミサッシ等)も官公需、住宅投資の不ぞえを主因に、生産、出荷とも引続き減少した。

この間、製品在庫の動きをみると、資本財輸送機械、耐久消費財は大幅増加となったものの、建設財が7か月ぶりに減少したほか、生産財も微増にとどまった。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関

係では、7～9月の一般資本財出荷は+1.9%となった(4～6月+2.0%)。一方7～9月の機械受注額(船舶を除く民需)は-6.5%となったが、経済企画庁「機械受注見通し調査」によれば、10～12月には+32.3%と大幅増加が見込まれている。

消費面では、9月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、東北地方を中心とする冷害地区の売行き不振のほか曜日要因もあって+8.0%と前月(+9.9%)の伸びを下回った。また耐久消費財の売行きをみると、10月の乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)は、モデルチェンジないしは新車種投入による拡販努力にもかかわらず-11.8%と4月以降7か月連続して前年水準を下回っている。もっとも、家電製品は、VTR、テープレコーダー等が好調を維持しているほか、暖房器具も寒気到来に伴い順調な滑り出しをみせている模様である。

9月の新設住宅着工戸数(速報)は、住宅金融公庫の4、5月募集分の着工本格化を映じて3.7%の増加となったが、7～9月通計では-11.8%の大幅減少となっている。

財政支出面では、9月の公共事業契約額(前年比)は-18.2%の大幅減少となったが、10月の公共事業請負額(前年比)は国、地方公共団体の発注増を映じて12.8%の伸びとなった(前月+11.4%)。

雇用情勢をみると、9月の有効求人倍率は0.72倍と前月(0.74倍)を下回ったが、完全失業率は前月横ばい(2.09%)のあと2.02%とわずかながら低下し、常用雇用(全産業、速報)も+0.1%と微増した。

消費者物価は騰勢鈍化

10月の商品市況をみると、末端実需の伸び悩みに伴う需給引緩みや原料コスト安による製品先安

感の強まりなどから、全体として軟弱な地合いを続けた。品目別にみると、石油製品(中間留分、C重油)に続伸ないし小反発がみられたものの、鉄鋼が主力自動車向けの減退(冷薄)や輸出の落込み、減産の足並みの乱れ(以上棒鋼)などを背景に市中の在庫荷もたれ感が強まったことから軟調裡に推移し、また合繊、石化製品、紙も原料価格の下落や安値輸入玉の流入などから軟化した。

一方卸売物価は、9月に-0.3%と3か月ぶりに反落したあと、10月に入ってから月上旬-0.5%、中旬-0.2%と引続き下落した(中旬の前年比上昇率は+13.3%)。品目別には、為替円高を主因に輸出入品が前月に続き大幅に下落したうえ、国内品も電力料金夏季特別割増制の適用期間明けや繊維、製材・木製品等市況商品の軟調などを映じて反落した。

10月の消費者物価(東京、速報)は、冬物衣料の高値出回りから被服がかなり上昇したものの、野菜が大幅に反落したため全体では0.1%の微落となった(前月+1.5%)。また、前年比上昇率は、前年が台風、長雨の影響から野菜、果物を中心に高騰したこともあって+6.8%と55年1月以来の低水準となった。もっとも季節商品を除くベースでは+8.4%(7～9月同+8.5%)となっている。

マネーサプライ伸び率は引続き鈍化

10月の銀行券月中平均発行残高(前年比)は、個人消費の伸び悩みなどを映じて+4.6%と前月(+4.4%)同様の低い伸びにとどまった。一方、財政資金は、外為会計が前年比様変りの払超に転じたことを主因に小幅ながら払超となった(14億円、前年10,029億円の揚超)。このため月中の資金余剰額は1,850億円となり(前年7,086億円の資金不足)、日本銀行は手形オペレーション等によりこ

れを調整した。

この間、コールレート(無条件物、中心レート)は農林系統等出手筋の放資増などから、月中では0.5%低下した(月末10.8125%)。また手形売買レート(2ヵ月物)も月央以降金利先安感に基づく資金取手筋の売り渋りもあって、月中1.25%の低下を示した(月末10.25%)。

9月のマネーサプライ(M₂+CD平残、前年比)は+8.0%となり(前月+8.3%)、7~9月中平残では現金、預金通貨の増勢鈍化を主因に+8.4%と前四半期(+10.1%)に比べさらに鈍化した。また9月の全国銀行貸出約定平均金利は-0.136%とかなりの低下を示した(8月-0.018%)。

10月の公社債市況をみると、月初弱含んだあと中旬末にかけては金利先安感の台頭に加え、国債整理基金による機動的買入も好感され持直したが、その後需給関係にさしたる改善はみられずほぼ保合いで推移した。一方、株式市況は上、中旬にかけて前月来の地合いをうけて上伸したが、その後は高値警戒観の台頭に加え、外人買いが細り気味となったことなどから小反落した(東証指数月末496.05、月中+7.26)。

経常収支は久方ぶりの黒字

9月の輸出(通関、ドルベース)は+3.1%(前月-1.6%)と大幅に増加、数量ベースの前年比では+16.3%(前月+17.7%)と高水準を継続した。品目別にみると、機械関連は、船舶が引渡し集中か

ら著増したほか、自動車の中近東、東南アジアなど非米地域向け中心に引続き好伸し、テープレコーダー、重電機器も好調を継続した。反面、素材関係では鉄鋼が数量減を主因に3月以降6ヵ月ぶりに前年水準を割込んだほか、合繊糸、人造プラスチックも伸び悩みを示した。

一方、9月の輸入(通関、ドルベース)は、前月著減(-13.7%)のあと-1.4%と引続き減少し、数量ベースの前年比も-13.5%と前月(-12.4%)をさらに下回った。品目別には、石炭が豪州の炭鉱スト収拾から増加したが、反面、木材が数量、価格両面から一段と減少し、原油数量も顕著な落込みを示した。

9月の国際収支は上記輸出入動向を映じて貿易収支(季節調整後)が1,431百万ドルの大幅黒字となり(前月同696百万ドル)、経常収支(同)も435百万ドルの黒字と54年2月以来1年7ヵ月ぶりの黒字となった。この間、長期資本収支は対日証券投資の盛行や外債発行の集中などから5ヵ月連続の大幅流入超となり、この結果、総合収支の黒字幅は946百万ドルと前月(879百万ドル)を上回った。

10月のインターバンク米ドル直物相場は、月初さらに円高となったあと安定した推移をたどり、下旬に入ってやや円安となったものの、結局211円75銭で越月した(月中25銭の円高)。

(昭和55年11月11日)